

もやはり相当な勇氣ですよね。

僕が離党するときに、本当に心から止めてくれたのは、一人は松野頼三さん、もう一人は三木武夫さんでした。この二人は本気で止めてくれた。

松野さんは本当に口説き上手だから、本心じゃないと思うけれど、三カ月待って、三カ月たってこの党がよくならなかったら俺も一緒に出てやるから、党改革と一緒にやれと松野さんには言われたね。松野さんは、ちょうどその前に例の党の綱領改正のときの政調会長で随分迷惑をかけ恩義があったから辛かったね。

それと三木さん、総理大臣だからね。夜中に三木さんの家に行って、三木さんの隣に座って膝をなでられながら説得されましたよ。今は懐かしい思い出ですね。

## 《自民党復党、宏池会へ》

○紅谷 昭和六十一年七月の衆参同日選挙で、自民党は大勝する一方で新自由クラブは六議席に減らし、十年間の新自由クラブの活動に幕が下ろされました。自民党に復党されて再スタートされますが、先生は、当選されてからしばらくは派閥に入らないで、半年後に宮沢派に入られました。

当選された六人のうち、先生と鈴木恒夫さんは宮沢派で、山口さん、甘利さん、小杉さんの三人は中曽根派に入れ、田川先生は復党されないと分かれました。いろいろな経緯があつたのかと思えますが、事情をお聞かせ願いたいと思います。

○河野 少しだけ補足をします。

昭和五十八年に中曽根内閣になって連立を組むんです。田川さんが入閣して、その次に山口さんが入閣するんだけど、その頃から自民党復党の動きが非常に強くなって来る。自民党からも呼びかけが

あるし、新自由クラブの中にも、そろそろ自民党へ行つていいんじゃないかという声が出始めてきた。

その頃に、中曽根総理のヨーロッパ訪問があつて、中曽根さんから僕と一緒に行かないかと直接声がかかったんです。同行議員として七、八人行きましたかね。小渕さんが同行議員の団長で、綿貫さんや山東さんも行きました。僕はあまり行きたくないと言ったけど、山口さんなんかはどうしても行けというので連れていかれた。パリでパリ祭のパレードを見たりした数日後に、中曽根さんから、ちょっと二人で話をしようじゃないかと呼ばれ、いよいよ来たなと思つて部屋へ行つたら、こういうことを言つたんです。

中曽根さんは、私がミッテラン大統領と隣同士に座つてパレードを見ていたのを見たかと言うから、見ましたよと。君ね、ミッテランという人は社会党の人だけど、今は考え方もやや保守に変わつて大統領になった。ああいうふう人間は変わらなきゃだめなんだ。世の中も変わるんだから君も変わらなきゃだめだと盛んに言う一幕があつたんです。復党の直接的な呼びかけがあつたのはそのときです。

もう一回は、内閣改造で今度は河野が入るといふときに官邸に呼ばれ、中曽根、金丸の二人がいて、次は河野君に入閣してもらおうつもりだけれども復党が条件だ、今すぐじゃなくてもいいけれども復党の約束をしたら入閣だと。それで、冗談じゃないと喧嘩になつて、それなら、連立を解消しましょうと言って帰つてきてしまった。

そうしたら、牛尾さんを通じて、あの話はなかったことに改めて入閣要請するから入つてくれと、それが二回目の勧誘でした。

入閣して次の選挙になって、自民党が大勝して連立は解消することになるんです。そこで、牛尾さんと浅利さんを通して、あれこれ言わずに戻つた方がいいという話になつて戻るわけです。

自民党に戻つて今度はどこの派閥に入るかという話になつたけれ

ど、僕が面倒を見るどころか、みんなどんどん話が進んでいるんですよ。僕は、中曽根派の代貸しだった櫻内さんから、君は中曽根派にいて離党したんだから、復党したなら中曽根派に戻るのが普通じゃないかといって、俺のところに戻ってこいと言われた。

僕は、いろいろ考えたけれど、基本的に中曽根さんの主張と違ってから中曽根派に戻るといわけにいきませんと。すると、自民党も中曽根派も幅は広いんだし、君だって昔いたんだから戻れないはずはないだろうとか、いろいろな話になったんです。

ところが、僕は同じ新自由クラブにいたけど、山口君とうまが合わず一緒にやるのは難しい。彼はもう中曽根派に入っていたし、僕が離党した直後に、僕の選挙区の神奈川五区に、中曽根派が亀井善之君を刺客に立てているから、僕が戻るといわけにいかないでしょうと、中曽根さんにお断りした。

そのときに小杉君は、河野さんが行くところへ一緒に行きますよ。小杉さん、鈴木恒夫さんと僕と三人がどこへ行くか考えようということになっていたけれども、今度は小杉君が中曽根さんと呼ばれて、中曽根さんと懇意だった東急の五島昇さんの二人から、中曽根派へ来るなら東急は全力を挙げて応援するけど、そうじゃないならだめだという話をされた。小杉君は自分の選挙区は東急沿線で選挙に影響があるので考えなきゃいかぬと言うから、それは考える必要はないから中曽根派へ行ったらいいじゃないかという話をして、小杉君は中曽根派へ行くことになって、鈴木君と僕と二人だけが残ったわけです。

みんな宏池会へ行くだろうと思っていたけれども、宏池会の中で反対運動があったんです。それはやはり加藤紘一君が宏池会のプリンスだから、僕が行くと僕の方が年も上だし当選年次も上で、加藤君の上へ行くかもしれないと。それで、加藤君本人はどうかかわらないけれど、取り巻きが心配して河野を入れるなという話になった

んです。

当時、加藤君をかわいがっていた伊東正義さんに呼ばれて、君は小なりといえども一党の党首をやったんだから、自民党へ戻ってどこの派閥に行くなんて言わないで、一人でいたらいじやないかと言われて、一人でいますからと言って半年くらい一人でいたんです。そうしたら、宮沢さんがとても心配をして、宏池会の中には反対もあるけど、それは僕が抑えるから一緒にやろうじゃないかと改めて誘われた。翌年の一月には、僕の選挙区の後援会の総会へ、堀内光雄さんが心配して宮沢さんを連れて来てくれたんです。宮沢さんが、かねてから河野さんを評価していて一緒に政治活動を行いたいと思っっているので、派閥にお迎えしたいと選挙区の前でいきなり言って、それで入ったんです。

鈴木君と一緒に入ったけど、最初は結構冷やかかなんですよ。でも、ありがたかったのは、名誉会長だった鈴木善幸さんがとても穏やかに迎えてくれて、宏池会の昼飯会に行くと、河野君ここへ座りたまえと、一番正面の席にと言うんです。村山達雄さんとか先輩がいっぱいいるわけです。宮沢さんが言うならちよつと遠慮しようと思っただけれど、善幸さんが言うから、いいかなと思って、上から五、六番目の席にいました。

○紅谷 そのときに、加藤先生はどこに座っていたのですか。

○河野 加藤君は、世話役だったから角にいたんです。後になってそれが非常に役立つときが出てくるんですけどね。

宮沢さんは、宏池会というのは池田勇人さんがつくった派閥で、池田行彦君がオーナーの婿だから、彼をないがしろには絶対できない、加藤君よりも池田君を大事にしなきゃいかぬという気持ちで宮沢さんは持っていたんですよ。

大宏池会構想という宏池会を一つにまとめようという構想があった、僕なんかもずっと後になってから呼びかけられて、僕は、麻生

さんをキャップにするならまとめてもいいという話をしていたら、宮沢さんに呼ばれて、麻生君もいければ、宏池会やはり池田君の意見を一番尊重しなきゃいかぬから、しばらく余り動かないでくれと言われた。しばらく経ってまた呼ばれて、池田君はまとめる必要がなく、加藤君一本やりだったという話だったので、大宏池会構想というのは、そこで僕はもう止めたんです。

今でも大宏池会構想はあるけれど、その当時の大宏池会構想は、宏池会の本来の主張をきちんと見直して、それを党内でもっと強く言うためには数が要するという構想だったんです。

その頃の宏池会は、鈴木善幸さんがいて、その後、伊東正義さん、田中六助さん、佐々木義武さん、さらに村山達雄さんとか大蔵省のOBがいっぱいいて、昼飯会では減税か増税かとか税の話ばかりだった。

○紅谷 少し戻りますけれども、中曽根派に戻られるのか、宮沢派に入られるのかという話以外に、今までの主張や人的関係から、河本派からの誘いはなかったのですか。

○河野 ありました。これが一番辛かったね。それは、河本さんを担いだ経緯があったし、河本さんの方も俺と一緒にしてもおかしくないと思っていただろうし、それから、鯨岡さんや坂本三十次さん、塩谷さんという友人が多数いたし、ここに行けば居心地は一番良かったと思うね。

僕が宏池会へ入るのは加藤君がとても慎重だし、先に入っていた西岡さんも田中六助さんの直系になっていて慎重で、加藤君は伊東正義さんとよかったから、田中さんや伊東さんも非常に慎重だった。その中でみんなは、宮沢さんが伊東さんなんかの反対を押し切って突っ張るはずはないと思っていたら、宮沢さんだけ頑張ってくれて入ったんです。

そういう状況の中で、自民党に復党して宏池会に入ったけれど、

何の肩書も仕事もないんです。宮沢さんから、しばらく一人でゆっくりされたらどうかとか言われたけど、そうもしてられないと思っていたら、派からは選挙の応援に行けと言われ、そんなことばかりやっていましたね。

○紅谷 宮沢先生の推しで宏池会に入られたということですが、宮沢先生とはお父様の時代から縁があったようですね。

○河野 私の父は官僚嫌いで、大蔵省というのは大嫌いだったんです。それなのに、春秋会という会を立ち上げて、その派閥創設の記念の勉強会に、春秋会から次の選挙に出るといって人が集まって、相当な人を選んで講演をもらったのですが、どういうわけか宮沢さんを選んでいました。いまだに、どうして議員でもない宮沢さんと呼んだのかわからないんです。

宮沢という人は池田さんの秘書官で、そういう縁もあって抜てきされて経企庁長官になって、やはりちよつと抜けて優秀だったんだと呼ばれたのかな。

そのとき、僕はサラリーマンで、ああ、宮沢という人が来るんだという程度の関心で、そこで初めて宮沢喜一という名前を聞いたんです。その次に会ったのは宮沢さんに言わせれば、おやじが死んだ葬式のときだと。宮沢さんは、あのとときのあなたの話しっぷりが何とも印象が良かったと繰り返し言われたけれども、僕は全然覚えてないし、宮沢さんがいたことも知らない。

その後は、自民党の綱領起草委員会の小委員長の座長を松野さんにやれよと言われたときに、宮沢さんからは、憲法問題が話題になるだろうけれども、絶対にさわらぬ方がいいですよとアドバイスを受けたりました。

さらに、ロッキード事件が起きて田中派が潰れて後をどうするかというときに、自分たちでこれならいいという候補者を担げという話になって、宮沢さん、石田さん、藤山愛一郎さんの三人を担いだ

んですが、三人とも断られたということもありました。

○紅谷 離党されていた昭和五十一年から復党されるまでの十年間は、宮沢先生とお会いすることはなかったのですか。

○河野 時々会っていましたね。離党するときには相談に行つて、復党するときも相談に行つていゝんです。その間は余り会つたという感じではないけど、お互いが物すごく関心を持ち合つて、宮沢さんが新聞の座談会で新自由クラブを評価するとか言つてくれたのを、僕は新聞の記事を見てとても喜んでみたり、僕が何かやつてゐるのを宮沢さんは、あれはいいとか悪いとかと言うようなことがありました。その間は、余り宮沢さんの家まで行つて上がり込んで話をするようなことはなかつたですけどね。

宮沢さんと僕は衆議院では同期なんです。昭和四十二年の当選ですが、宮沢さんはそれまで参議院を二期やつて、衆議院に鞍替えしたときに一緒に当選したんです。だから、四十二年組というときには名簿に宮沢喜一とあつたけれども、宮沢さんは参議院をやつて大臣もやつていたから、僕らが一年生議員で拓世会という会を作つて佐藤批判をしているときには出てこないで、全く高みの見物をしていたんです。

宏池会に入れてもらつて、最初から余り居心地が良かったわけじゃないけど、あちこちの選挙のたびに応援に行つて、応援してもらつた連中は選挙が終わると好意的になるといふようなことで、選挙をやるたびに大分変わる。だけれども選挙をやるまでは、新自由クラブには随分厳しく批判されたという恨みがあるから、なかなか馴染めない。

それから、田川さんに言われて、新自由クラブで落選していた候補者を、復党するときに連れて入つたんですが、選挙区では自民党に相手にされないんです。東京の伊藤公介さんは対立候補がいたし、大阪の中馬弘毅さんは大阪府連が絶対入れないと言ふ。そのう

ち、今度は神奈川県では小此木県連会長が河野一派は絶対入れないと言ひ出した。

僕が自民党へ復党するときに、僕と中曽根さんと党首会談をやるんです。竹下幹事長も入り、そこに小此木県連会長も同席して、各県連で入れるの入れないのでごたごたしないようにと竹下さんが言つてるのに、選挙の恨みだからしようがないんだろけれども、あちこちで意地悪されましたよ。

それを田川さんはよくわかつていて、君が戻つて面倒を見るよと言われたから、随分あちこち頭を下げて頼んで回つたけど、半年前まではぼろくそに言つていた相手だから結構厳しかったんだ。そういうことがあつたけど、何とか一応収まつたんです。

宏池会というのは公家集団と言われて、喧嘩しない戦わない集団なんです。それで、戦わない集団じゃだめだ、戦おうと随分言つて回つた。だから、選挙というと必ず手伝いに真先に行けと言われて、宏池会でも選挙の弱いところばかり回りましたよ。

○紅谷 そのような経過があつて、自民党に十年ぶりに戻られたのですが、自民党は変わつていたのでしょうか。

○河野 全然変わつていなくなつたね。復党したときに、なぜ復党したかと聞かれて、自民党も俺らが離党したころとは全く変わつて、良くなつた、きれいになつたから戻つたんだと言つたけれども、実際は全然変わつていなくなつたね。

○紅谷 新自由クラブを経た十年間で、自民党に対する見方は変わったのでしょうか。

○河野 自民党という党は、トップによつて変わるんです。だから、大平自民党のころは随分変わったなというふうに思いました。それが、中曽根自民党になつたらやはり昔の自民党だという感じですよ。

ただ、その中で後藤田という人だけがちょっと異質だったんです。

ね。中曽根内閣の官房長官をやられて、僕が科技厅長官で入閣したときにも、後藤田さんはいろいろ話を聞いてくれ、後藤田さんの主義主張があつて、そこはすぐ救いがありました。

### 《予算採決の本会議欠席》

○紅谷 竹下総理は、当時の安竹宮と言われる、安倍、竹下、宮沢の三人の候補者から、中曽根裁定で昭和六十二年十一月に誕生しました。自民党内では待望の大派閥の総理でしたから、長期安定政権になるだろうと思われていたのですが、ここでリクルート事件が起こります。

竹下総理は、中曽根内閣での売上税の失敗の後すぐに消費税三%を実現し、本格政権という流れの中で内閣改造をしましたが、リクルート問題の広がりや複数の閣僚が就任直後に辞任し、予算委員会では中曽根前総理の証人喚問要求も出てきて、竹下内閣の内閣支持率が三%台にまで落ちてしまいました。

平成元年度予算は、リクルート問題、中曽根証人喚問問題で紛糾して終わりが見えない状況でしたが、竹下総理が四月二十五日に辞意表明をし、自民党は一気呵成に採決という流れになっていきましたが、その予算を採決する本会議を先生が欠席されたわけですから、その経緯をお聞かせください。

○河野 そこは少し記憶が飛んでいますけれども、今言われたとおりですよ。

中曽根長期政権は党則を変更してまで延々やったけど、偉いというか後継者をちゃんとつくったんです。竹下さんは大蔵大臣を、安倍さんは外務大臣を、それから宮沢さんは総務会長だったか、とにかく三人ともちゃんといろいろな仕事をさせたから、その安竹宮の三人は誰がなつても完全にリリースできるだけの肩ができて準備万

端でした。

ところが、不思議なのは三人で決めろという話になって、三人が一つの部屋に入って二日も三日も話をしたり、ゴルフを一緒にやるとか何やるとかしたけれど、結局決まらない。

それで、中曽根一任にするわけです。中曽根さんは竹下さんを後継に指名して、それだけでいいのに、安倍幹事長を指名し、宮沢大蔵大臣も指名する、そういう状況で竹下内閣ができた。そんな状況だから、その三人が中曽根証人喚問なんかを認めるはずがないんです。

あのときの社会党は強かったですから、中曽根証人喚問をやらないうと予算の採決に絶対応じないと頑張るんです。僕は総務でしたが、総務会ではもつと果敢にいきばきやれとかいう議論が出て、最後の段階で、安倍幹事長から、万策尽きた、これ以上彼らの言うとおりにできないから、ベルを押し強行をやるというんですよ。

鯨岡さんと僕は反対だ、本予算を野党欠席のまま採決するなんていうことは前代未聞で、やっちゃだめだ。社会党が頑張るなら、ここは発想を変えて、中曽根さんに証人喚問に出るように幹事長が説得すべきじゃないかと言ったんです。安倍さんは、そんなこと言っちゃってできないよと言いつつ押し問答になったんです。そうしたら、伊東総務会長が、今の話もあるから、中曽根さんにもう一回言ってみてと言つて総務会が休憩になった。それで会館の部屋にいたら突然予鈴が鳴つて本会議だというんですよ。何だ、総務会で何の経過の報告もないのかと思つたけれども、安倍さんが中曽根さんに出てくれなんて言うはずがないけど、竹下総理は辞意表明をして、相当犠牲を払っていたから、どうしても本予算の採決をやるというわけなんです。

そうしたら、鯨岡さんと議員会館の玄関先でばつたり会つて、鯨岡さんは悠々としていて、こんなにお日様が高いのに強行採決もない

ものどとかぶつぶつ言っているんです。それより中曾根証人喚問はどうなったんですかと云ったら、やらないで本会議を強行するらしいから俺は帰るから君も一緒に来いと誘われて、車に乗ろうと思つたところへ鈴木恒夫さんが運悪くやってきた。恒さんはどうするんだと言ったら、いや、本鈴がと。本鈴も何もこんなばかげたところへ行っちゃだめだよと言ったら、恒さんも止めましようと言つて会館へ帰つて、僕は鯨さんの車に乗つたんです。どこに行くのかよくわからなかったんですが、ニューオータニのロビーの刀屋さんに行つたんです。そこは鯨さんの行きつけの店で、刀を見ると心が洗われるとか言いながら、刀の講釈を聞いているうちに本会議が終わっちゃつて、欠席。

そうしたら、えらい勢いで怒られた。でも、本会議に欠席した人は何人もいて、金丸さんなんかも欠席だったんだ。

○紅谷 自民党の欠席者は十六名いて、金丸先生は海外旅行中という理由でした。

○河野 そんなにいたんですね。宏池会でも何人かいたのに、僕と鯨さんだけはえらく怒られた。そのときは幹事長は安倍さんだったけれども、もう体が悪かったから橋本龍太郎幹事長代理が欠席者を呼んで嚴重に注意するという話になって、一等先に僕が幹事長室に呼ばれて、洋ちゃん、竹下だつて本当に苦労してやっているんだから、いいかげんにしないでだめだよ、これは相当しこるから簡単に考えちゃだめだ、相当用心しないとだめだよと懇々と云われて、まあ、しようがないかといつて、そこはそれで終わつたんです。

○紅谷 あの本会議は、竹下総理が辞意表明をして臨んだ、いわば職を賭して予算を上げるといふものでしたから、自民党は一気呵成にいく一方で、野党の抵抗は非常に強く、本会議の採決は、議長室の前が野党議員や秘書の座込みで、当時の原議長がなかなか本会議場に入らず、最後は腕を引つ張られながら入つた写真が残つていま

す。

ですから、そこまでして自民党は本会議に臨んだというので、後に竹下派から強い反発があつたようですね。

○河野 本予算の採決を与党だけで行つたというのは前代未聞だつたと思うな。

法案の採決ではあつたけど、本予算の採決を与党だけでやるという過去の例はないと聞いていたから、そんな無茶をしちやいけないう言つたつもりだったし、今でも一大汚点を残したんじゃないかと思つている。でも、それは国対筋から見れば、竹下は命を削つてやつたのにけちをつけるのはけしからぬというので、本当に怒つたんだよね。

僕も鯨さんも、与党だけで採決をして上げるのは良くないから、もっと社会党を説得するなり中曾根さんを説得するなりすべきじゃないかと言つていたので、消費税を含めた予算に反対したと言うけど、予算に反対したわけじゃなく手続きに反対したんだと言つても、なかなか理解されなかつた。その結果、後々随分響いたんです。

○紅谷 今おっしゃるように、総予算の採決で自民党単独というのは初めてでしたから、当時の野党第一党の社会党の抵抗が非常に強くて、多賀谷副議長が辞意を表明する。その後、原議長、山口敏夫議運委員長も辞めることになり、三役揃つての辞任でした。

○河野 そうでした。とにかく、与党だけで予算の採決をすることはよくないというのが僕の主張だったんです。

○紅谷 後に河野先生が議長の時きも、やはり与党単独での採決というのはダメだと随分おっしゃつていました。

○河野 僕が議長のとときには共産党や横路副議長などが出てくれたから単独にならなかつたんだ。議長としては野党も入つて議論をしてやつてほしいと思つていたけど、最後に一回だけあつたのかな。

○築山〔衆議院事務局〕 最後に一回だけ、平成二十一年の常会で選挙が近く、内閣不信任案否決後で野党は出ないことになり、横路副議長までも最後は出られなかった。その一回だけです。

○紅谷 本会議を欠席されたことで、橋本先生の忠告どおり、後々まで尾を引いたわけですか。

○河野 あれで、竹下派からは、何かといって河野だけは絶対だめとなった。事実とは違うのに河野洋平は消費税に反対したと言われた。

○紅谷 どこかで書かれて公になっていると思いますが、先生が官房長官就任の際に、読売新聞の渡邊恒雄さんからもそういう話があったようですが。

○河野 それは露骨だったけど、全く勘違いですよ。余り言わない方がいいんだろうけれども、宮沢さんから改造内閣で官房長官との内示を受けて待っていたのに、何も言っていないからどうしたのかなと思ったら、渡邊さんが消費税に反対した河野だけは絶対だめだといって頑張っているというんだ。僕は読売の社長がだめだから内閣の組閣が止まると思うし、何をばかなことを言っているんだと思った。

それで、自分で渡邊さんに会ってきますと言ったら、宮沢総理が、堤清二さんと相談してみてくださいと云うんです。堤さんという人は、渡邊さんや日本テレビの氏家さんと同じキャリアの人だったんです。堤さんに連絡するまでもなく電話がかかってきて、河野さん、何か止まっているみたいですけど、ナベツネさんに会いますかと言うから、行きますと。

それで、読売新聞に向かっている途中で、堤さんが、ナベツネさんに会うなら氏家さんに先に会って氏家さんから話をさせた方がいいのではないかと。それで、日本テレビへ行って氏家さんと話したら、勘違いかと言われる、じゃ、俺が言っておくからいいよとなった

んです。

だから、僕は氏家さんに、新聞社の社長なんだから新聞をもう一回読み直したらどうですかと、僕が消費税に反対したかどうか、ちよっと新聞でチェックしてみてくださいよと言ったんですよ。

○築山〔衆議院事務局〕 結局、中曽根さんの証人喚問を衆議院予算通過の一カ月後ぐらいにやりますよ。

○紅谷 参議院の予算審議が終わった直後で、あれは中曽根さんが自分から手を挙げて実現したという話でした。

○河野 たしかそうですね。もっと前にやってくればよかったですね。

### 《永年在職議員表彰での決意》

○紅谷 昭和四十二年に三十歳で初当選され、昭和五十一年に自民党を離党されて新自由クラブを結成。昭和六十一年に自民党に復党されるといふ経過を辿り、平成三年に衆議院から永年在職表彰を受けられました。その挨拶では、腐敗との決別、新しい自由主義の確立、硬直した政治からの脱却と、今までの経緯を述べられた後に、新たな決意とおっしゃっています。議員活動二十五年を過ぎ、新たな決意、思いというのは何だったのでしょうか。

○河野 表彰を受けた人が多数だったから挨拶文として書いただけでしたが、腐敗との決別、新しい自由主義の確立、硬直した政治からの脱却、これは新自由クラブ立党のときに言ったのと同じことを言っています。今なお大きな課題ですね。

黒い霧解散の昭和四十二年の選挙で初当選でしたが、そのときに三十何人かが自民党で当選して多くが残っていたから、あのときは本会議場の演壇に並び切れないうらいで、僕は一番後ろの端っこのでした。

僕と山口君以外はみんな自民党一筋で、もちろん社会党も公明党もいる中で、僕だけが与党も野党も両方経験し、ある意味じや二十五年間で一番いろいろな経験をしてきたなという感じで、改めて政治活動を、一からというよりはむしろマイナスからの出発という状況でした。自民党に十年いた間は文教族でしたが、そこから自民党を離れたので、みんなはそれぞれ専門分野があつて、農林の専門家とか建設の専門家とか財政の専門家とか、僕は何族という専門職がないんですよ。そういうことを含めて、全くゼロから始めなきゃいけないという気持ちでした。

だけでも、相変わらず政治は自民党の一派支配で、派閥は大部分崩れかけていましたけど、それでもまだ派閥の領袖はみんな総理大臣を狙っていたから、総裁選が一番の政治的な戦いの場だったし、難しいときでした。

○紅谷 ロッキード事件を契機に自民党を出されましたが、戻られたらリクルート問題。戻ったはいいけれども、やはり昔のロッキードの頃と重なるものがあつたと思えますが。

○河野 同じようでしたね。リクルート事件は、僕らの同僚も随分傷ついて、一番代表的なのは藤波さんですよ。

自民党の中で、将来を嘱望されたと思うようなのはほとんどリクルートが押さえていたわけで、ある意味じや、僕は離党していなかったから、あの事件にひっかかっていないという感じがあつたぐらいでしたね。

議員では藤波さんと公明党の池田克也さんの二人が起訴されたけど、秘書絡みでは多くの議員の名前が出て、絡んでいたことだけは間違いないから、みんな嫌な思い出だつたんだよね。

リクルートだけじゃなくて、別の事件もあつて、あのころはバブルで、やたらに、それまでと一桁二桁違うような金が動き回っていましたね。

少し時系列がはつきりしないけど、北海道にホワイトドームを作るとかという話で、阿部文男という人がひっかかった事件がありました。彼は宏池会だったけど誰も面倒を見る人がいなくて、秘書が僕に助けを求めてきて困ったことがありました。

○紅谷 共和事件で、平成四年でしたから同じ時期ですね。十年に一度は大きな疑獄事件が出てくると言われていましたが、それ以降はありません。ですから、ちょうど先生が自民党に戻られ永年表彰を受けられた頃は、昭和六十二年の売上税、六十三年の消費税、平成元年のリクルート、そして平成三、四年にPKOがあり、国会は徹夜国会の連続で、与野党の対決が最も激しい時期でした。

### 《PKOと日本の国際貢献の在り方》

○紅谷 PKOと日本の国際貢献の在り方については、PKO法案が、宮沢内閣の平成四年六月に成立しました。このときは加藤官房長官ですが、実際に派遣されるようになったのは河野官房長官になつてからです。

PKOについては、海部内閣の頃からの流れがありました。平成二年の湾岸危機を発端とする湾岸戦争に、米国を主力とする多国籍軍を支援するため、平成三年度予算を内閣修正し九十億ドルを支出するという、政府にとつては非常に大きな決断がありました。ところが、資金は出したけれども国際的な評価は余り得られなかった。

つまり、物的支援やODA、それから開発途上国の支援とかでお金は出すけれども、それが国際貢献としては通用しないような時代になつてきたと言われました。

それを受けて、海部内閣でPKO法案を出しましたが継続になり、宮沢内閣が引き継いだという流れでした。ねじれ国会の中、宮沢内閣では公明、民社の協力を得て、参議院で修正の上で衆議院で可決

して成立させたという大変な国会でした。

当時、先生は外交調査会長でしたけれども、PKO法案を、どうみていらしたのでしょうか。

**○河野** 少し戻ると、竹下政権がリクルートで倒れて宇野内閣になったけど二か月余りで辞め、それで海部内閣になる。人材が全くなくて、まさかと思うような若いところまで探しまくって海部総理になるんです。あのときの自民党は、金丸さんの一強支配で竹下さんなどが心配しましたが、殆ど独断で海部さんになるんです。

海部内閣でPKO法案が出されるけど、衆議院で継続扱いになって、海部内閣は総辞職して宮沢内閣になりました。そこでは、加藤さんが官房長官になって答弁を非常にうまくやられた。

当時の日本は、国連の分担金もアメリカに次いで二位になるし、ODAの拠出も世界で一番か二番になるところまでいって、金で国際貢献は済ませて、割と国内的にも理解されどんどん行っていたわけです。

ところが、湾岸戦争になって、金を出せばいいというものじゃない、日本は金を出すけれども汗をかかないなどと批判され、海部さんはびっくりして、しかし人を出すわけにいかないからやはりお金でやろうというので、国民一人頭幾らと税金を上げて拠出するわけです。それで予算を修正して、金は出すから海外派遣には行かないようにしようとしたけれども、党内的には、やはり出したいという意見も相当あったんです。僕がいた外交調査会でも、ODAの拠出はやるけれども、それだけでいいのかという議論もやはりぶつぶつとありました。

金を出せばいいというものではないけれども、人を出すわけにはいかないから抑えていたけれど、結局、アメリカのプレッシャーがあつて、PKOをやらざるを得なくなった。あの頃、PKOが国際的に流行りでした。しかし、PKOといっても元々PKOは何だと

いう話からするわけで、PKOは別に鉄砲を撃つわけじゃないとか、それは完全に内乱の双方の話がついてから間に入ってやるのだから大丈夫だと、しかも、あのときは、PKOではなくPKFでなきゃ駄目だとかというガリ国連事務総長の話があり、それを抑えながらPKOをやるわけです。

だから、党内的には、宮沢さんとか後藤田さんとかが自衛隊の海外派遣は絶対駄目だと言ったけれども、結局抑え切れなくなって、そのときには小沢さんたちが旗を振って国連軍が行くときには行ってもいいじゃないかみたいな説明もあつて、最後に納得したのは、どうせ国連軍なんてできっこないし、作ったからといって直ちに海外派遣ということにはならないから、というような説明を外務省がしたんじゃないかと思うけど、それで皆が自分の不安を抑え込んでPKOをやる。

それは、憲法違反にならないという話になったんですよね。

**○紅谷** そのために国内法の体制を整備しなくてはならないので、PKO法案を制定する必要があるということでした。

**○河野** 一方では、国連軍なんてできっこないから、そんなのやつてもしようがないよという話があつたり、いや、できるかもしれないから準備のためにやっておかなきゃいけないという全く仮説というか、もしそれができればそうなるよというような話でね。PKO法案を作ったからといって、直ちに日本が出ていくというようなことにはならないだろうと言って抑えていたんですね。

**○紅谷** PKOについては、宮沢総理と国連のガリ事務総長が、いろいろ話をされていたと思います。

**○河野** 宮沢内閣になってから、ガリ事務総長が海外に自衛隊を出してくれと言ってくる。宮沢さんは非常に丁寧に話をして、我々は国際貢献は喜んでやりますが、憲法上の制約があるから海外派遣はできないとはつきり言って、ガリも最後は分かりましたとなった。

一時は、憲法が邪魔でできないなら憲法を変えたらどうかみたいな発言がアメリカからあったりしたけれど、それは全部無視していました。

○紅谷 ガリ総長からは、PKOの問題だけではなく、国連の分担金の問題や日本の常任理事国の問題とかを絡めていろいろ要求されたようですね。

○河野 それは宮沢・ガリ会談でかなり話をしました。僕は同席していたのですが、最初から最後まで英語の会談でした。宮沢総理は、すぐく丁寧に完璧に説得し切って、憲法の制約でできないものはないけれど、国際貢献は最大限やりますということまでは言いました。ガリも、分かったからPKOだけはやってくれという話になったんです。

国連では今でも日本は敵国条項に入っているから、僕らも国連に敵国条項ぐらい外せと盛んに言ったけれども、それは出来ないんですよ。

○紅谷 PKO法案の国会審議は、海部内閣でPKO法案の前段の国際連合平和協力法案を出しましたが、衆議院で廃案となりました。その後、PKO法案が提出され、引き継いだ宮沢内閣で激しい国会論戦が行われました。

○河野 PKOは、海部内閣のときには、党内的には宏池会系の人などは割と消極的だったんです。表立って言ったわけじゃないけど消極論があつて、海部さんに引つ張っていく力も余りなかったから結局できなかった。宮沢内閣になって、海外派遣はやらなければいけません。国際貢献はやるということで腹を決めて踏み切ったから、宏池会もその気になり加藤紘一君が張り切った。それで、参議院もうまくいったんじゃないかな。

○紅谷 国会での経過としては、平成三年秋の臨時会で衆議院では可決しましたが参議院で継続となり、翌年の常会で参議院で修正し

衆議院で可決成立しました。野党は絶対反対でしたから牛歩で抵抗し、参議院本会議は五日間、衆議院本会議では三泊四日でした。さらに、法案を絶対阻止するというので、社会党と進民連の百四十人ほどが議員辞職願を出して、櫻内議長預かりになりました。

○河野 激しかったよね。自民党は、通すために国対委員長を増岡さんから竹下派の梶山静六さんに替えたりした。

委員会では、委員長が委員長室に入ったところで開会宣言をして、大混乱の中で採決したよね。

○紅谷 委員長は、今の林芳正外務大臣のお父さんの林義郎さんで、委員長席に座れなくて、第一委員長室の端に追いやられ、そこで開会を宣告し、採決しました。

○河野 あの頃、国際貢献をやらなきゃいかぬというのは固まっていたけれど、何をやるかというのが議論だった。

武村君は、国際貢献といったって鉄砲を担いでいくことが国際貢献じゃなくて、経済的なものもあればいろいろあるものがあると、しきりに言っていましたね。

○紅谷 PKO法案成立後に内閣改造があつて、先生が官房長官に就任され、実際にPKOの派遣になっていきます。平成五年に、カシミアへの派遣になります。そこで、文民警察官の高田さんが亡くなり、その前にPKO要員ではないのですが、国連ボランティアの中田さんが亡くなったという事件がありました。

○河野 官房長官でありながら、国連ボランティアというのは全く視野に入っていなかったんです。突然、国連ボランティアの日本人が殺されたというのでびっくりして、そんな事もあったのかみたら。それは、うかつといえませんが、驚いた。

亡くなった中田さんという人は立派な青年で、学生時代から国際貢献をやると言っていた。遺骨を引き取りに行ったお父さんが、彼は国際貢献をするのが自分の人生の目的だと言っていたから、そこ

で死んだから本望のはずだと言われるんですよ。

僕らは、相当何か言われるのではないかと思っていたから、本当に驚いたよね。遺骨を抱いて帰ってきて、どこの記者会見でもすぐ立派な発言をされるんです。

○紅谷 その際に、PKOの派遣である自衛隊員や文民警察官は、原則安全なところに行くけれども、国連ボランティアの人たちは危険なところに行くんじゃないかという批判的な意見があったと思います。

○河野 国連ボランティアで行くと、日本人もどこの国の人も全部一緒に扱うわけだから、カンボジアの国内どこへでも派遣されていく。自衛隊は安全なところに行かないのが原則だと言っていたから、僕らはそれはとても困ったんですよ。

というのは、カンボジアへ出すのは、アジアのこういう紛争に日本は貢献していないから、ここは進んで貢献するということで納得した。それからもう一つは、国連の事務次長の明石康さんがカンボジアの国連代表だから、明石を支えなきゃいけないと同時に、明石が日本側の言うことを大体聞いてくれるよという話で、自衛隊を出すに当たっても、余り衝突しないようなところにしろとか、いろいろなことを言うんだ。明石さんも困って、日本人だけ特別扱いするわけにいかないけど、私も日本人ですからみたいなのを言っていたんだよね。

明石さんは一番上にいたけれども、人の配置や何かを実際に担当していたのはみんな外国人だったから、全然そんな話は通用しなかった。それでも、結局自衛隊はとて安定した地域に行ったんですよ。自衛隊は自分で行って陣地を造って、井戸を掘ったり風呂まで設営したり、自分で御飯を炊いて食べるわけだから、完全な自己完結型だったんです。一方警察は、警察庁が各県の県警に連絡をして優秀な人材を公募しろと行って各県から集めて、七、八十人行った

んですかね。

高田さんは岡山県警でした。最初に僕らが聞いていたのは、カンボジアでは交通指導員若しくはカンボジア警察を指導するのが主たる仕事ということだったけど、行ってみたら全然そうじゃなくて、四、五人がチームで日本人は一人で他は外国人、それがカンボジア全土に散ったんです。

ひと頃はうまくいっていると思っていたけど、後で聞いてみたら、全然連絡も取れなくて、食うにも困った時期もあったというんだ。

警察は、食えなくなったり、海外でそういう仕事をするという訓練を受けていないから、言葉は通じないし、一時は本当にかわいそうに痩せ細ったらしいんです。

連絡が取れずそういう状況が分からないというので、通信機器を一人ずつに持たせたりした。そのうちに、周りで銃声が聞こえたとか、何か変なのがうるうるしていて危ないとかと言っているうちに高田さんがやられたんですよ。

プノンペンと話をしてもさっぱりがちが明かないので、宮沢総理に、これは何とかしなきゃ駄目だと言ったら、総理は誰かをやりましょうと。それなら私が担当だから行きますと言ったら怒られた。君は本部長代理だからじっとして、誰か派遣してくださいと言われ、警察担当の村田敬次郎国家公安委員長にお願いしたら、二つ返事で私が行きますと言って、現地へ行くんです。行ってみると、現地は意思の疎通がないから相当ひどかったようで、村田さんは随分苦労されたらしい。

プノンペンへ全員呼び戻して話をしようと言ったら、交通手段や警護の問題があるから戻ってこれず、なんとか連絡だけはできるようにしたけど、みんな大変だと泣き言を言う、だんだんそういう現地の話が家族に伝わってくるようになって、亡くなった高田さんは岡山県警だから、橋本龍太郎君が僕のところへ来て、河野さん、警

察官は現地で大変だ、よほどしつかり手当てしないとえらいことになるよと言ってきました。

○紅谷 四月に中田さん、五月には高田さんが亡くなり続きましたので、PKOは安全なのか、このまま継続するのかというような話はなかったのでしょうか。

○河野 ゴールデンウィークで大臣がみんな外遊して、宮沢総理もオーストラリアかどこかへ行って連休の途中に帰ってきた。僕が羽田へ迎えに行ったら、君も休暇を取れと言われるので、僕は軽井沢へ行ったんです。

ところが、行った翌日に、カンボジアの様子がおかしいから東京に戻ってくれと言われたけど、汽車はいっぱい車は大渋滞。結局、SPと二人で汽車で立ったまま帰ってきました。

官邸に行ったらマスコミに囲まれ、こんなに死んだのだからカンボジアから引き揚げろというんです。二、三人死んだんじゃないかというのが第一報だったんですよ。三人も死んだら、帰らざるを得ないかもしれないと思いつながら官邸に入ったら、死んだのは一人で他にけがをした二人は国境からタイ側へ逃げ込んで、タイの病院にいたんです。そんなことで情報はカンボジアだけじゃ分からなかったけど、森山眞弓文部大臣が外遊でタイにいて、病院へ行ってくられて、本人たちはショックを受けていたけど、落ち着いてきて元気だから大丈夫だと言ってきた。

総理に報告したところ、亡くなった方には気の毒だけれども、一週間後に選挙だから、ここまで来たらやり遂げるまで引き揚げはしない、このままいくという決意でした。

もう一つ心配なのは、日本から出している選挙監視団がパニックを起こす可能性があるから、それを落ち着かせなきゃだめだよ。

投票所は大体はお寺で、寝泊まりする場所がないんですよ。そこで野宿して監視するというんです。周りにポル・ポト派がいて、選

挙は絶対やらせないとか投票所を爆破するとかいう話が伝わってきて、これは大変だよ。

監視員が四十人も行っているのをどうするんだというので、こっちは大変な騒ぎになったんです。憲法違反になるかもしれないけれども、自衛隊がいるんだから監視員の護衛をさせる、鉄砲を持って全部回りに行けとか、自民党の部会はいよいよ言うわけですよ。

だけれども、そんなことは憲法上できないから、宮沢さんの決裁で、自衛隊は輸送はできるといふふうになっているので、輸送だと称して投票所の周りを空のトラックをぐるぐる走り回らせる事にしたんです。それで、撃ってきたらどうするかとか、撃たれたらどうするかとか、想定問答を随分やりましたが、全部杞憂に終わって選挙は大成功で終わるんです。

だから、投票日にカンボジアの選挙が始まりましたとテレビに映って、着飾った人が行列して投票所に向かっていますという画面が出たときは、みんな涙が出ましたね。

○紅谷 最初のPKOの派遣で死者が出たわけですが、PKO五原則がありながらも、結局、現地に行ってみないと、どういう状況なのかよく分からないというのが実態だったのですか。

○河野 そうでした。野党は、もう五原則が崩れている、崩れたら引き返すと言っていたじゃないかと言っけれど、実際は、さっきの話のように各国の四、五人がチームになっているのに、ここで日本人だけ帰すなんというのはできないだろうと言いたいけど、そうは言えないから、五原則が崩れている、崩れていないという水かけ論ですよ。

その途中でまた困ったのは、そういう議論をしている途中で、自民党外交部会でモザンビークにもPKOを派遣しろという話になるんです。

外務政務次官の柿沢弘治君がモザンビークまで行って見えてきて、

五原則は完全に満たしているから当然行くべきだと言いに来たので、僕は絶対駄目だと。薄氷を踏む思いでカンボジアのPKOをやって、国民もどうなるかと見ている途中なのに、あっちもこっちもというわけにはいかなから駄目だと言ったけど、自民党からは出さないのは何でだと相当言われて、最後は、河野が官房長官をやっているから駄目なんだと、外務省はさんざん言われた。

宮沢さんも初めは絶対やめようと言っていたのに、途中で出したらしいんじゃないかと言って結局出すんだけど、出すときには完全にモザンビークはある意味で勝負がついて、もう何も無いというときまで待つて出しましたね。

○紅谷 モザンビークの後も次々にPKOで派遣され、当時は相当な議論がありました。それから三十年ほど経過して、今は自衛隊の海外派遣という議論は、国会ですっかりなくなってしまうように思いますが、いかがですか。

○河野 今は海賊の見張りでジブチなんかに行っていますよね。あんなのは終わったらさっさと帰したらいいと思うし、なるべくあっちにはいない方がいいと思う。ゴラン高原や南スーダン、大分出ていたんですね。安保条約もそうだし、こんな議論をやっていた頃は、もっと社会党がしっかりしていて、毎国会相当議論があったんだけど、最近はどう全然なくなってしまうたね。

議論をしないと、緊張感もなくなるし何でもいいみたいになつては良くないと思いますね。

○紅谷 国会で議論するというのは国民に対する問題提起でもあるわけですから、それがなくなつたと思われる現状はいかがでしょうか。

○河野 それは、議論の結果、かなり難しい話になつちゃう、例えば安保条約だって、どこまでが限界かという議論になつたり、議論のための議論みたいなことになることもあるんだけれども、それで

も、ある程度投げかけるといふようなことが大事だと思うんですね。そういう意味では、あの頃はすごく緊張感がありましたよ。

官房長官で国会では繰り返し返し答弁していたけれども、相当苦労しました。

#### 《内閣官房長官として》

○紅谷 宮沢内閣は平成三年十一月から、解散した平成五年八月までで、平成四年十二月に内閣改造があり、そこから河野官房長官として宮沢総理を支えていかれます。

八か月の在任期間でしたけれども、随分大変な時期でした。お話ししていただいたPKOの問題、平成三年に消費税の引き上げがあり、佐川問題、極め付きが政治改革の問題で、官房長官として難問が山積する中で宮沢総理を支えていくのは本当に大変だったと思います。

しかし、リクルート事件の余波などもあり、宮沢内閣の支持率はどんどん下がっていったという状況でした。

○河野 支持率が一番高いときで四七%でした。海部内閣から宮沢内閣になって、PKOなんかやっている間に、自民党は政治資金のスキヤンダルが次から次へと出てきて、極め付きは宮沢内閣の予算が上がったその日に金丸逮捕ですからね。

そんなことがあって、宮沢さんに対する金丸さんのプレッシャーはなくなつたけれども、党内がばらばらになつて一致して何かやるという結束力が全くなつていた。宮沢内閣で僕が官房長官になつたのも、金丸、竹下の呪縛がなくなつたからだろうけれど、それまでは河野入閣は絶対駄目と言われていた。幸か不幸か、金丸さんの失脚で宮沢さんが何でもできるようになった。

僕は、官房長官で一番びっくりしたのは、宮沢さんから、河野さ

ん、官房長官をお願いしますよと組閣前日に言われて、いよいよ組閣を始めるから来てくださいと言われて行ったんです。組閣本部には宮沢さんが座り、三役の梶山さん、三塚さん、佐藤孝行さんがいて、その横に僕が座った。

そうしたら、そこへ渡辺ミッチーが何で俺が組閣本部に入らないんだと怒鳴り込んで来るんですよ。それはミッチーがその改造前までは副総理だから、それで座り込んでんじやうんだ。

駄目だと言うわけにもいかない中、宮沢さんが組閣名簿を配ったんです。組閣本部で名前を入れていくと思っていたら、全部名前が入っている紙を配ったんですよ。

するとミッチーが、運輸と郵政は歴代俺のところを出しているのに、今回出さないなら俺はもう入閣しないからと、凄い剣幕で怒った。梶山幹事長は、人事権は総理にあるんだからと言ってミッチーのフォロウをしないし、佐藤さんも三塚さんも一言も言わなかった。宮沢さんはしばらく黙っていたけれど、ミッチーが言うだけ言って終わりになったら、まあこれをお願いします、いいですねと。そして、すぐこっちを見て、官房長官は発表に行ってくださいと。それで、そのまま発表だった。

ミッチーがいろいろ言った中で、船田さんは竹下派の順番じゃないのに受けるのかとか言ったら、宮沢総理は、受けますから大丈夫と言った。つまり、事ほどさように、竹下派の力が落ちていたんだね。もちろん加藤官房長官が相当やっさに違いないと思うけれど、その時にちよつとびつくりしましたね。本当に、党内的には経世世の力が落ちてきたと感じた場面でした。

竹下派の分裂直前という時期で、竹下派は小淵さんだけで、梶山さんなんかは全然そうじゃないわけ。この頃、小淵さんは何かで外れていて、この後に僕が自民党総裁になったときに、副総裁を小淵さんにして引つ張り上げるんだけど、それまで彼は全く無役だった

んです。

○紅谷 宮沢内閣の支持率の話がありました。支持率が二〇%を割り込んで総理の顔が見えないという話があつて、河野官房長官の提案で「総理と語る」という対談を企画されます。

○河野 それが大失敗。僕は田原総一郎さんを対談相手にするつもりはなかったんですよ。「総理と語る」という番組を作るのがいいというのは、僕らが官房長官室で相談して、やろうと持って持っていたら、宮沢さんは、ああ、いいなど。

あれは、アメリカ大統領のタウンミーティングという企画があつて、大統領が暖炉の脇で一人でいろいろなことを言うんだけど、宮沢さん一人ではとてもしゃべらないだろうというので、誰か対談の相手がいて引き出さないと駄目だから対談形式にすることになった。まさかその相手が田原総一郎とは思わなかったんだよね。この人は何を言うか分からない人だから、危ないなという気はしたんだけど、案の定やられた。

○紅谷 それが政治改革という話に繋がっていくわけですね。

○河野 宮沢さんはそんなに変なことを言っているわけじゃないんですよ。だって、政治改革をやりますかと言われたら、総理大臣だからそれはやりますと言うに決まっている。それで、本当にやるのか、私は断じてやるんですよと言ったんだ。

僕は、政治改革について何度も宮沢さんに、どうしますかと言ったら、宮沢さんはやらなければいけません。政治不信を解消するためには、スキャンダルを起こした人間は、二度と政治には関わり合えないような厳罰を科すことが必要だ。それはイギリスに腐敗防止法があるから、あれでいいんじゃないかと思うと何回も僕には言っていたんですよ。それがだんだん意図的に小選挙区制へ引つ張り込まれて、どんどん選挙制度の改革こそ政治改革で、中選挙区制が駄目なんだ、小選挙区制じゃなきゃ駄目だとなってしまつたわけ

す。

あのときは、かなり意図的に、決められない政治、スピードがない政治は駄目だ。つまり一か所に権力を集中して、どんどん進めていく政治でなきゃ駄目だ、そこへ持っていったわけです。

僕は、それは極端なことを言うと、ある意味で独裁の道じゃないか、確かにくだくだ牛歩戦術ばかりやっているのも駄目だけど、だからといって一発でばっばつと決めるといのはいかがなものかと思っていた。

○紅谷 当時は、野党との対立よりも、むしろ自民党内の対立、それは改革派と守旧派という色分けがされ、右か左か、マルカバツかの二者択一の政治という様相でした。

○河野 郵政民営化が典型的な例で、党内で絶対賛成と絶対反対がいたり、それ以外でも、いろいろな法案に対して賛成も反対もいて典型的な例は、四人区とか五人区という中選挙区制では、自民党の公認候補のうち二人が賛成で一人は反対。その三人目の候補は反対と言わないと当選しないわけですからそうなるんですよ。三人目がまた賛成と言ったんじや、絶対当選しないわけだから。

そうすると、政党政治なんだから党としての意思をはっきりさせるためには一人に絞れと言う。確かに決まる政治ではあるけれども、今日のような多様性が求められている時代に、一つしか主張がないというのでいいのかなという気はしましたね。

○紅谷 これは政治改革のところでお話ししていただきますけれども、小選挙区制が本当に日本の風土に合っているのか、一人だけ選ぶ、マルカバツだけでいいのかという意見は随分ありました。

○河野 今度のアメリカの大統領選挙みたいなもので、五十一対四十九でバイデンが勝ったけれど、あれだけ票を取られるとトランプの存在というのは絶対否定できない。五十一対四十九という場合に、四十九で落ちた人はどうするんだ、つまり、死に票になっちゃうわ

けど。複数区にすれば、それが二人になったり三人になったりして拾い上げられるけれども、四九%の死に票をどうするんだという話で、比例区でそれは救えるとか、いろいろなことを言ったけど、今は小選挙区での落選者が比例で復活してくるとかという話になって、余り死に票を生かすということになっていないんだよね。

○紅谷 最初の小選挙区制の選挙からもう四半世紀たちますけれども、二大政党制を目指してという目的が、現状がどうかというと、今も公明党もそれなりの数、共産党も一定数あり、維新が新たに出てきました。当初言っていたようにはなっていないと思いますが、如何ですか。

○河野 全然なっていないね。小選挙区にすれば金がかからなくなつて金のスキャンダルがなくなるだろうとか言うけど、結局金は同じぐらいかかっているんだよね。

官房長官としては、宮沢さんが護憲派で改憲に非常に慎重だということがあつて、僕の信条と元々合っているものだから、とてもやりやすかつたですね。最近の官房長官を見ると、全然自分の意に沿わないことを一生懸命いんだと言わなきゃならない官房長官が大勢いる中で、僕は、宮沢さんが思っていることは大体自分の主張と合っていたからね。

○紅谷 当時の閣僚には、後藤田先生が法務大臣でいらつしやいましたので、護憲トリオという印象でした。

○河野 最初は、渡辺外務大臣が改憲論を盛んにぶつ。党は三塚さんが政調会長で改憲論を盛んにぶつので困ったんです。でも、途中から渡辺さんが体調を悪くして副総理・外務大臣を辞めたから、宮沢総理がアメリカへ行く前に、僕は宮沢総理に、宮沢内閣が不安定で話し相手としていかがなものかとアメリカが思うようでは困るので、安定感のある体制をつくった方がいい。そのためには、経世会とも話ができる後藤田さんを副総理にしておいた方がいいのではな

いかと話したんです。

宮沢総理は反対するかと思ったら、それは後藤田君が受けてくれるかなと言うので、私が使いに行きますからといって後藤田さんのところに行きました。後藤田さんは、また俺かいと言うので、何とか頼みますよとお願いすると、じゃ、やろうと引き受けてくれた。宮沢、後藤田という取り合わせは、最初は余り合わないかなと思っただけでも、すごく合ったんですよ。

### 《宮沢内閣と政治改革》

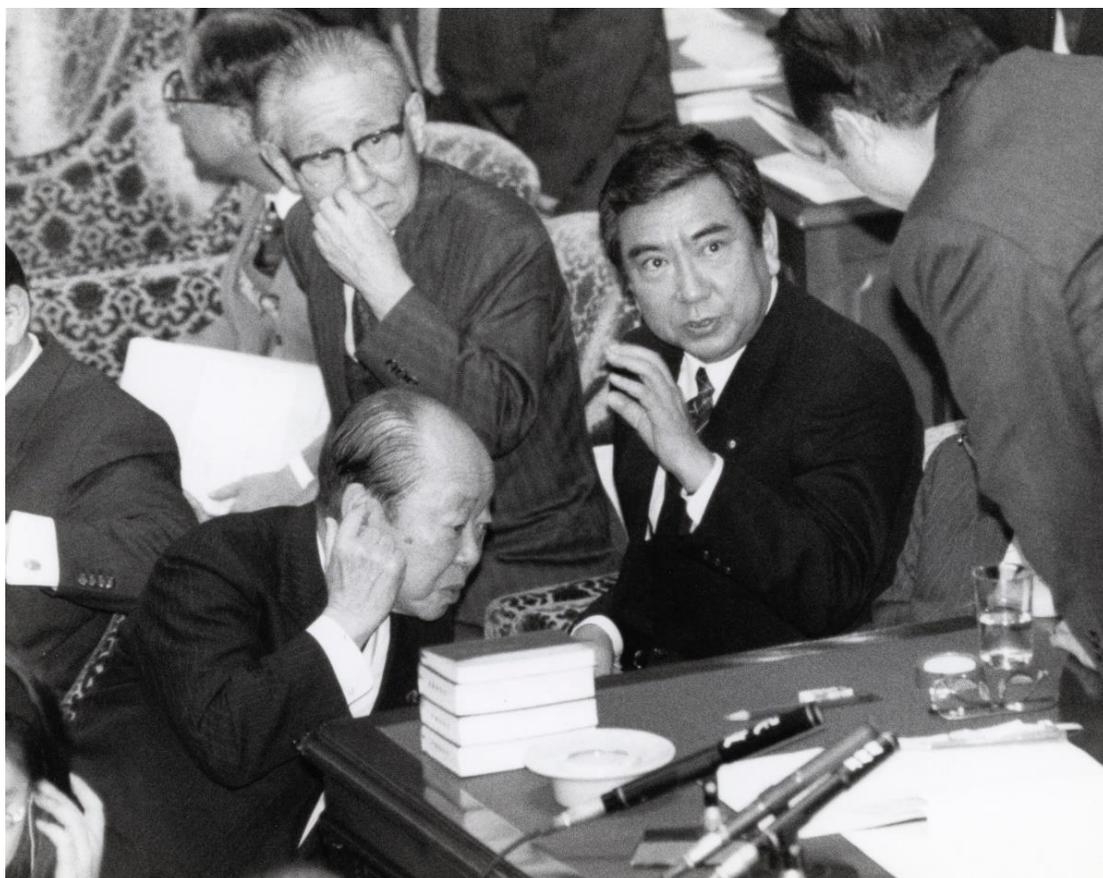
○紅谷 政治改革の問題は、宮沢内閣になって出てきたわけではなく、海部内閣のときに政治改革法案が出されて廃案になり。海部内閣は総辞職して宮沢内閣に引き継がれたという経過です。

従って、宮沢内閣も政治改革の実現を最重要課題とせざるを得ない状況でしたが、この頃の与野党は、まだ中選挙区制が本音と言われ、選挙制度改革に関する動きはまだ鈍かったというのが実情ではなかったかと思えます。

ただ、そういう中で、金丸前副総裁が闇献金事件等で議員辞職して逮捕され、世論の政治に対する見方が非常に厳しい状況だったと思います。宮沢総理は、政治改革についてどうお考えだったのでしょうか。

○河野 宮沢総理は、初めは政治改革イコール選挙制度の改革とは思っていませんでした。確かに政治腐敗があって、世論の政治に対する信頼感が下がったということをとて心配して、何とか政治の信用を取り戻さなくてはならないということについては非常に真剣だった。

どうすれば信頼が回復できるかについて、宮沢さんは、世論の動きとか世論の批判、政治不信というものの高まりとか与野党の駆け



引き、党内的にも守旧派と改革派の対立というのが非常に厳しくて、腐敗防止法ということで収まらないということになって、腐敗防止法を具体的に公に言うことは余りなかったんです。

私は、宮沢内閣の成立を待望して、何とかして宮沢政権をつくろうと思つて努力をしてみました。宇野内閣が失敗して、海部内閣がうまくいかず、宮沢政権は久々に本格政権の誕生だと言われて期待がありました。

ただ、その本格政権と言われた宮沢さんの本来の得意技は国際関係とか経済財政問題で、政治改革とか党改革というのは、いわば一番不得手だったんですね。不得手だけど避けるわけにはいかず、取り組まなきゃならないという状況で苦心したんです。

思えば、野党は政治改革と言うけど、それが選挙制度の改革にすり替えられた頃から、例えば、社会党内は小選挙区は絶対嫌だという声が非常に強かったし、小選挙区になると不利だから実は相当腰が引けていたと思うけど、時の勢いで止めたというわけにはいかな

いものだから、結局、勢いそのままに進んでしまった。その頃は、野党よりも、むしろ民間政治臨調がメディアとくつついて、どんどんと進めたんですね。世論調査をやると政治改革だということになるから、野党も及び腰ながら乗らなきゃいけない。

そして自民党内は、守旧派とレッテルを貼られた人と改革派とに分かれて対立が始まったんです。最初は改革派の勢いがいいけど、宮沢政権とすると、本当にどっちにも行けないという進退窮まったような感じになった。それを外から見ていると、どっちに向かっているのか分からぬという状況ですよ。それで、その総裁を補佐すべき党三役が梶山、佐藤、三塚で、三塚さんは政治改革積極論でしたが、梶山、佐藤というのは、態度不明なんです。梶山さんは、本心は無理じゃないかと思つていたようです。宮沢さんのところに来れば、やりましようとはいうものの、できっこないよという感じで、

だから野党と話はするけれども、進めるといふ感じじゃないんです。そうになると、世論からの政治不信、その政治不信を解消しようとする政治の姿勢に対する批判がさらに高まって、支持率がどんどん下がるわけです。

僕は心配して、何とか支持率の低下を食い止めたい、それから政治改革を何か考えなきゃいけないということで「総理と語る」という企画をすることになったんです。

そして、政治改革を本当にやるのかとそこで言われ、やるんです、必ずやりますと、そこは力を込めて総理は言った。総理が必ずやると言つた以上は、この国会でできないと嘘をついたことになる、という話になってしまったんです。

会期末になって、会期延長をしてやる以外にないんだけど、国会対策のパイプは機能しないんですね。結局、やると言ったのにやらなかったじゃないか、だから嘘をついたじゃないかという批判をさ

んざん被つてしまったんです。  
**○紅谷** あの頃は、自民党の中にも政治改革に熱心で純粋に今の選挙制度じゃ駄目だから変えなくちゃいけないという人もいましたが、本当は、旧経世会の羽田さんと小沢さんのグループと、小沢さんと梶山さんのグループの対立で、そういう中で政治改革が俎上に上げられたという指摘があったかと思えます。

**○河野** そうでした。  
羽田・小沢組対小沢・橋本、まあ、橋本君は余り旗幟鮮明じゃなかったけど。小沢、梶山さんたちは現状維持というか、そんなに急に小選挙区なんてできないという感じですよ。

**○紅谷** 梶山さんは、PKOのときに、増岡さんと国対委員長を交代しましたが、政治改革については自分は反対だという条件付で就任したと聞いています。

**○河野** そうなんですか、それは聞いていなかったですね。

内閣の中だって必ずしも一色じゃなくいろいろな議論があつて、例えば、あのときは小泉さんが郵政大臣で入っていたし、船田経済企画庁長官と中島衛科学技術庁長官のように内閣不信任に賛成した閣僚も入っていた。

党内では、後藤田さんは積極的な推進派で、森喜朗さんと小泉さんは小選挙区は嫌な方でした。だから、閣内も一色じゃないし、自民党は真つ二つというほどではないけど、どうも賛成も反対も両方あるなということには分かった。

社会党に至っては小選挙区は絶対駄目という感じで、公明党も小選挙区になればもう選挙はできないよという感じですよ。

そういう中で、民間政治臨調はやれやれと言う、メディアはやらなきゃ駄目だと言ひ、もう進退窮まったような感じでしたね。

○紅谷 自民党は、予算が成立した後に、党議決定していた単純小選挙区制法案を出し、社会党、公明党で小選挙区比例代表併用制法案を出しましたが、成立するとはお互い思っていなかったのでしょうか。

○河野 世論の高まりで、党の姿勢として何かしなきゃいけないけど、最後は相打ちで両方潰そうという思いもあつたんですよ。

あの頃は、政治家は実際の議論というのを余りやっていなかったように僕は思うんですよ。ただ、国会の中では、政治改革特別委員会の田邊國男委員長の下で、委員会としてはとても真面目に審議をしていて、田邊さんからは、こういう議論をしていると盛んに僕らは聞かされました。

そういう動きもあつたけど、結局駄目なんですよ。それで、宮沢さんは何回も梶山さんと呼んで、最後は自宅に呼んで二人で大酒飲んでふらふらに酔っ払うまで話し合つたけど、梶山さんの腹は最後まで分らなかったんです。そういうことがあつたけど、結局、国会の会期がなくなつて時間切れになつてしまつた。

○紅谷 宮沢総理としては、会期延長してでも何とかやりたいという意向だったようですが、与党の方針が決まらなかったのですか。

○河野 結局、どの案を議論して進めたわけでも採決したわけでもなくて、別のところで、やるやらない、言つた言わないで潰されちゃうわけですよ。

○紅谷 そういう中で会期末を迎え、内閣不信任決議案が提出されました。

○河野 それが、力が入っちゃつたんだよね。しかも、あのときは小沢さんも羽田さんも改革をやると言い、それに乗せられて海部さんも張り切つて、やると言つた。海部さんのパフォーマンスの陰で、実際は小沢・羽田、小淵・梶山闘争という平成研の分裂騒ぎなんだけれども、表向きは、海部さんが推進派を率いて進めていったというような感じになつたんです。

○紅谷 内閣不信任案が提出されて、官邸としては、自民党からどの程度の人が賛成に回るのかと票読みもされたのでしょうか、何か対抗策は考えられたのでしょうか。

○河野 小沢・羽田グループが賛成に回り離党もするだろうとみんな思つていて、それを食い止めようというので、宮沢さんは羽田さんに外務大臣を要請するんです。羽田さんは結構乗り気になつていたけど、帰つたら小沢さんに怒鳴られて、断りに来たんですよ。

それは、なぜそんなことをしたかという、船田君と中島君が大臣の辞意を表明したのだから、彼らが引いちやうことが分かつたわけです。それで、何とかそれを止めなきゃいけないと言つていたら、そこは宮沢さんの独自の判断で、羽田君を呼んで外務大臣をやらないかと言つて詰めた。結局、羽田君が断るに及んで、ああ、これは駄目だな。

しかし、実際何人が賛成に回るのかというのが分からない。二十人離党するんじゃないか、三十人離党するんじゃないかとか言つて

いるうちに、さきがけグループも離党するという話になった。そこで後藤田さんが、離党するとしても、まだ自民党員なんだから不信任案には反対して、否決した後で離党するならすばいじやないかと言って、さきがけグループは反対したけれど、予測を超えて小沢グループの賛成者が多かった。

○紅谷 票読みはなかなか難しかったと思うのですが、梶山幹事長は不信任案が可決されるとは思っていないでしたよね。

○河野 梶山さんは絶対否決できると思っていたと思うよ。だけれども、宮沢総理の出身派閥の宏池会は全く国会対策が弱いから、どうなっているのかわからなかったんですよ。

宮沢さんは、河野に官房長官をやらせるけれど、与党対策は副長官に近藤元次君をつけて、近ちゃんにやってもらおうと言ってくれ、僕もしましたけれども、結局、宏池会で分かっているのは近藤君と加藤君だったんだよね。

○紅谷 内閣不信任案が可決したのは六月十八日ですが、その少し前に議連の議会制度協議会があり、座長は与謝野議連委員長でした。与謝野さんと梶山幹事長は一体と言われていました。

その議会制度協議会が終わった後に、与謝野さんが残っていたので、不信任案がどうなるのかという話をしたところ、与謝野さんは梶山さんと話しているけど、不信任案が通ることはないから君たちは心配する必要はないよと言われたんです。ですから、自民党執行部は不信任案が通ることはないと思っていたのだと思いますね。

○河野 その頃に、僕は櫻内議長を訪ねて、このままじゃもう駄目です、宮沢の食言になってしまいうから、本当に政治改革をやらせてほしいから、会期の延長をお願いしますと話をしたら、会期延長はできないが、私がいなくなれば本会議ができなくなる。それでいいだろう、それしか方法はないからと言われるんです。私は独断で来たので総理と相談しますから、ちよつと待つてくださいと議長公邸

を出た。

それはまずいなと思いつつも総理に話したら、そんなばかなことをしちや駄目だ、すぐ断つてこいと言われ、櫻内議長に断りに行きました。

不信任案採決当日の午前中に、宮沢総理が櫻内議長のところへ行くんですよ。宮沢さんは、そういうやり方でなくて会期を延長する方法は他にないかと言うけれど、櫻内さんは、いろいろ考えた挙げ句、俺がいなくなるしかないと言われるので、結局お断りし不信任案に突っ込んだんです。

宮沢という人は、ちよつと強情な人で、ある意味じゃ偏屈みたいなところがある人だったけれど、僕に言わせれば、あの人は政治家の中では一番恥を知っている人です。恥ずかしいことだけは絶対嫌なんです。その人が、嘘つきと言われるのが一番こたえたんだね。不信任案の趣旨弁明も賛成討論も、嘘つきだの連発ですよ。国民に重大な嘘をついているとか、言ったのをやらないのは嘘というんだと何回も言われて、宮沢さんを横で見ていると、本当にカリカリしているんです。それでも否決されればそれで済むと思ったけれども、僕は途中からもう駄目だと思ったね。結構大差だったよね。

○紅谷 賛成二百五十五、反対二百二十でした。内閣不信任案が可決されて、解散か総辞職かについて議論があったようですが、どういう話だったのでしょうか。

○河野 不信任案が可決されると解散か総辞職かで、普通なら総辞職を取る。そうすれば政権党は代わらないからね。しかし、渡辺さんが来て、総辞職、総辞職と、総辞職すればミッチーに行くものだから。それを後藤田さんが、解散だ、絶対これは解散だ。

僕も、ちよつとどきつとしたんです。ええっ、何で解散ですかと言ったら、当たり前じゃないか、一週間後には東京サミットで総理が議長をやるんだ、総辞職したらサミットをどうするんだと。解散

すればこのままいくんだ、宮沢はサミットをやる責任があるんだと言いつつ切った。それで解散したんです。

悪いことに都議会議員選挙まで重なって、都議選をやって、総選挙をやって、片っ方で東京サミットをやつてと、大変な場面になった。

ところが、衆議院選挙も始まって、三日間のサミットが終わって、これから本格的に選挙に取り組もうという日に後藤田さんが倒れるんです。

後藤田さんが倒れていなければ、後藤田さんを中心にして連立構想とかできたと思うんです。つまり、後藤田さんが武村さんに声をかけるとか、あるいは宮沢さんが細川さんに声をかけるとかして、十人か二十人集めれば過半数になったわけです。

後藤田さんが倒れて宮沢さんもショックで、党を代表して連立構想をするという司令塔がいなくなつたんですよ。

梶山さんは辞表を出す、三役がみんな辞表を出して、ついでに三役が辞表を出して総裁だけ残るはずはないとか余計なことを言うんです。そこで、本当に党としての司令塔はなくなつた。あんなに運が悪いというのも珍しいと思う。それで、あれよあれよという間に、みすみす細川政権になつてしまつた。

### 《河野談話》

○紅谷 いわゆる河野談話についてですが、総選挙を前にして残されたのが慰安婦問題でした。この問題は宮沢内閣の前の海部内閣のときから、さらには戦後問題としてずっとあつた問題でした。

○河野 日韓基本条約を作ったときに、気がついていいる人は気がついていたらけれども、それを抑え込んできたわけだからね。とても皮肉なことで、日本が韓国に経済援助をする、民主主義を持つこと

を教えようとする。するとみんなが発言するようになって、その結果、慰安婦についてどんどん発言するようになって、日本は何だという話になるわけです。

○紅谷 お話のように、昭和四十年の国交正常化と請求権協定で終わったと思つていたら、平成になってから、韓国側は経済成長もある程度遂げて、対等に話すようになってきてから急に出てきたという印象です。

○河野 あの基本条約を決めた頃は、まだまだそんな発言をする状況じゃなかつたけれど、事実はあつたわけですからね。事実はあつたけれども、その前に食わなきゃいけない、生きなきゃならぬということがあるから、そのことで精一杯で、そのために日韓の政治は動いた。それが、食べられるようになって動けるようになったら、本来の痛みはやはり痛いということになってきたわけです。

○紅谷 二国間の協定は、約束事でしょうけれども、やはり立場上、強い立場と弱い立場がありますので、後になって問題が出てくるのは、日米間でもあつたことだと思います。

○河野 もちろん外務委員会なんかでは、慰安婦問題を社会党の女性議員が質問し、韓国へ行つて慰安婦だった人なんかと話をして、実はこういうことがあるじゃないか、どうするんだという話は議論になつていたんです。議論になつていたけれども、そのときは、もう日韓協定で終わつていますというので門前払いみたいな形になつていたけれども、個人の痛みは、やはり痛いものは痛いで残つていたわけだからね。

宮沢内閣で九十二年一月に宮沢さんが訪韓するのですが、そのときに相当厳しく言われて、帰つてよく調査して返事をしましょうと言つてくる。そこから加藤官房長官が資料集めを一生懸命やるけれども、日本側に資料はないんですよ。しかし、事実があつたということとは明々白々で、それは、例えばオランダ人の慰安婦というのが

あつて、オランダ政府が強制連行を認定していて、裁判で有罪判決を受けたりしたんです。日本だって、その後の裁判では、みんな事実関係は明らかになっちゃうわけだから。

○紅谷 宮沢総理も、軍としての関与は認め、韓国での国会演説でもお詫びをされました。

そこで、更に真相究明を約束するという事で当たられたのが、加藤官房長官から引き継がれた河野官房長官になります。

○河野 各省にまたがっているから官房長官がやれということ、加藤さんが前半をやり、後半は僕がやることになったんです。

河野談話というのは、九十二年一月の宮沢訪韓がきっかけではあるけれど、韓国に向けてだけ出されたものではなくて、太平洋戦争当時に日本軍が関わった、フィリピン、台湾、インドネシアとかにも慰安婦はいたわけで、その人たちに対して、あるいはその国々に対して向けた談話なんです。

きっかけは韓国だったし、韓国が一番批判が強かったので韓国に向けて言ったフレーズがあるけど、あれは慰安婦問題全体に対する談話で、それを韓国向けだけと誤解している人が多いんです。

そして、その談話を発表した後の記者会見のやり取りの中で、強制連行はあったということでもいいんですけどという質問に対して、そうですね、それで結構ですと私が言ったことを、一部の人たちが今もって、そんな事実もないのに強制連行を河野が認めてけしからぬと言っているんだ。

しかし、オランダの植民地だったインドネシアにいたオランダ人女性を、日本軍が強制的に引っ張ってきて慰安婦にしたというのは、オランダ政府が認めているからね。

それから、これは議論が分かれるところだけでも、日本政府の人が韓国に行って、当時、慰安婦だった人たちに聞き取り調査をして、これを一部の人たちは、でたらめだとかうそ八百だとか言っ

ているけど、もう四十年以上たつて記憶が曖昧な部分はあるけど、発言の内容は心証として明らかに強制的にさせられてというふうに宮沢総理も思われて、そういう意味で強制があったということで結構ですとなった。

ただ、具体的に連れてこいとか引っ張ってこいという軍の資料は残っていないけど、軍がそんな公式文書を残すわけがないよね。当時の内務省の事務官だった奥野誠亮さんが、終戦の日に軍の資料をいっぱい燃やして処分したとインタビューでも言っているとおりですよ。

○紅谷 日本と韓国の間で国交正常化や請求権協定がある中で、韓国は政権が替わるたびに、慰安婦問題は別だ、徴用工の問題は別だよという主張は、日本政府としては困るのですけれども、ただ、一貫して、河野談話については、歴代の内閣は踏襲しているわけですから、それは紛れもない歴史的な事実として、誰も否定できないわけですよ。

○河野 一旦は否定しかけた安倍総理も、アメリカまで行って河野談話のとおりですと言っているんです。

もう一つ、河野談話で微妙だと思っポイントは、あれは官房長官談話であつて内閣の意思ではないということを使う人がいるけれども、確かに村山談話と違って閣議決定をしてないんです。しかし、官房長官が公式の記者会見で公式に発言していたら、内閣一体の原則じゃないが、それは内閣の意思として官房長官が言っているということになるでしょう。

○紅谷 宮沢総理も了承された上で発言されているわけですよ。

○河野 そうです。それを、あれは知らないなんて内閣が言ったら逆に大変なことになるよね。

村山談話は、河野談話を見ていたから、慎重を期して閣議に諮っ

たんです。

慰安婦問題は、韓国側の政権交代や徴用工問題も相俟って複雑になっていくけど、韓国の新政権誕生で、新たな日韓関係の改善、解決を望むところです。

### 《河野総裁誕生》

○紅谷 平成五年の常会で、自民党内の分裂により宮沢内閣不信任決議案が可決され、衆議院は解散、総選挙になります。

六月十八日に解散し、選挙は七月十八日ですが、その間にG7東京サミットが開催されました。自民党は分裂の上に、サミットが開催される中での選挙でしたが、どういう選挙戦だったのでしょうか。

○河野 宮沢総理は、東京サミットの準備もあったけど、それよりも嘘つきだ何だとさんざん言われて信頼度が下がってしまつて、選挙応援ができないんです。特にほぼ同時にあった都議選の応援要請はほとんどないんです。それで、僕と森山眞弓文部大臣に応援要請が偏ったんです。

選挙の出陣式は、野党は数寄屋橋や新宿でやっているのに、自民党は党本部の前で形だけやって終わりでした。僕は官房長官としてサミットの記者会見もやらなきゃいけない、選挙の応援要請もあるというのでとても大変でした。

サミットは迎賓館でやって、そこから選挙応援で八王子など都内を回って、戻ってきて記者会見というようなことを繰り返していました。僕らが本格的に選挙に集中できるのは、サミットの宮中晩さん会が終わって各国首脳を見送ってからです。

総理は応援に行くことはできないので、そうなるかと頼りは後藤田副総理だと僕は思っていたんです。サミットが終わって、後藤田さんと二人で外国の皆さんをお見送りし、後藤田さんから、明日か

らしつかりやろうと言われて別れたんです。それでホテルへ帰ってシャワーを浴びていると電話がかかってきて、後藤田さんが倒れて日赤病院に入ったというので、これは大変だと思ってタクシーに乗って病院まで飛んでいったんです。

後藤田さんは心臓が悪くて倒れたんです。行った時は落ち着いていたけど、医者からは余りしゃべったりしてはいけないと言われて病室へ入ったら、河野さん、お渡しするものがあると言うんです。

渡されたのは辞表で、総理の補佐もできずに申し訳ないと書かれていた。これは受け取るわけにはいかないのでお返ししますと言ったら、いや、持っていけど、多少の押し問答をしていたら医者が飛んできて、心臓が悪くて寝ている人と押し問答なんかしちや駄目だと怒られ、一応受け取って帰ってきたんです。結局、宮沢総理には渡しませんでした。

選挙は一生懸命やっただんですが、その選挙が勝ったか負けたかというの、なかなか微妙でした。

○紅谷 選挙前に、自民党三役で票読みをされたと思いますが、どういう読みだったのでしょうか。

○河野 それがよく分からなかったんです。というのは、経世会が分裂して閣僚を含めて何人ぐらい出ていくのかが分からなかったんです。

それからもう一つは、不信任案には反対票を投じたけれど、武村さんたちのさきがけが離党して、その時点で過半数を割ったのだから選挙は大変なのに、党内は幹事長が全然司令塔の役にならなくて選挙らしい選挙ができないんですよ。

あの時は五十人ぐらいが離党して、選挙では、自民党議員の数と選挙後の当選者の数では一人増えたんです。だから、議員数としては一人増えたけれども、過半数割れをしまいました。

○紅谷 選挙結果は、追加公認を入れて二百二十八人になりました